

夏目漱石「私の個人主義」

1914年(大正3年)11月25日学習院輔仁会で講演/『わたしの個人主義』1978講談社学術文庫(抜粋/四木)

私は大学で英文学という専門をやりました。その英文学というものとはどんなものかとお尋(たず)ねになるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中だったのです。その頃はジクソンという人が教師でした。私はその先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作って、冠詞が落ちてると云って叱られたり、発音が間違っていると怒られたりしました。試験にはウォーズワースは何年に生れて何年に死んだとか、シェクスピアのフォリオは幾通りあるかとか、あるいはスコットの書いた作品を年代順に並べてみるかという問題ばかり出たのです。

年の若いあなた方にもほぼ想像ができるでしょう、はたしてこれが英文学かどうかという事が。英文学はしばらく措いて第一文学とはどういうものか、これではどうい解るはずがありません。それなら自力でそれを窮(きわ)め得るか云々と、まあ盲目(めくら)の垣覗(かきのぞ)きといったようなもので、図書館に入って、どこをどううつても手掛がないのです。これは自力の足りないばかりでなくその道に關した書物も乏しかったのだらうと思います。とにかく三年勉強して、ついに文学は解らずじまいだったのです。私の煩悶は第一ここに根ざしていたと申し上げても差支ないでしょう。

私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てどうとう教師になったというより教師にされてしまったのです。幸に語学の方は怪しいにせよ、どうかこうかお茶を濁して行かれるから、その日その日はまあ無事に済んでいましたが、腹の中は常に空虚でした。空虚ならいっそ思い切りがよかったかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然たるものが、至る所に潜んでいるようで堪まらないのです。しかも一方では自分の職業としている教師というものに少しの興味ももち得ないのです。教育者であるという素因の私に欠乏している事は始めから知っていましたが、ただ教場で英語を教える事がすでに面倒なのだから仕方がありません。私は始終中腰で隙があったら、自分の本領へ飛び移ろう飛び移ろうとのみ思っていたのですが、さてその本領というのがあるようで、無いようで、どこを向いても、思い切ってやっと飛び移れないのです。

私はこの世に生れた以上何かしなければならん、といって何をして好いか少しも見当がつかない。私はちょうど霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦(すく)んでしまったのです。そうしてどこからか一筋の日光が射(さ)して来ないかしらんという希望よりも、こちらから探照灯を用いてたった一条(ひとすじ)で好いから先まで明らかに見たいという気がしました。ところが不幸にしてどちらの方角を眺めてもぼんやりしているのです。ぼうっとしているのです。あたかも囊(ふくろ)の中に詰められて出る事のできない人のような気がするのです。私は私の手にただ一本の錐(きり)さえあればどこか一力所突き破って見せるのだがと、焦燥(あせ)り抜いたのですが、あいにくその錐は人から与えられる事もなく、また自分で発見する訳にも行かず、ただ腹の底ではこの先自分はどうなるだらうと思って、人知れず陰鬱な日を送ったのであります。

私はこうした不安を抱いて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越し、また同様の不安を胸の底に畳んでついに外国まで渡ったのであります。しかしいったん外国へ留学する以上は多少の責任を新たに自覚させられるにはまっています。それで私はできるだけ骨を折って何かしようと努力しました。しかしどんな本を読んでも依然として自分は囊の中から出る訳に参りません。この囊を突き破る錐は倫敦(ロンドン)中探して歩い

なつめ・そうせき 1867-1916

江戸生まれ。東京大学英文科卒業。英文学者・作家。

1900年文部省留学生として渡英、帰国後1903年東京帝国大学英文科講師、「文学論」「十八世紀英文学」を講ずる。

1907年朝日新聞社入社。以後多くの名作を残す。

著書『吾輩は猫である』1905、『坊っちゃん』1906、『草枕』1906、『虞美人草』1907、『三四郎』1908、『それから』1909、『行人』1912、『こゝろ』1914、『道草』1915、『明暗』1916 ほか

ても見つかろうにならなかったのです。私は下宿の一間の中で考えました。つまらないと思いました。いくら書物を読んでも腹の足にはならないのだと諦めました。同時に何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなって来ました。

この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作り上げるより他に、私を救う途はないのだと悟ったのです。今までは全く他人本位で、根のない萍(うきぐさ)のように、そこいらをでたらめに漂よっていたから、駄目であったという事によく気がついたので。私のここに他人本位というのは、自分の酒を人に飲んでもらって、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてしまういわゆる人真似を指すのです。一口にこう云ってしまえば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人真似をする訳がないと不審がられるかも知れませんが、事實はけっしてそうではないのです。

近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向うの人がとやかくいうので日本人もその尻馬に乗って騒(さわ)ぐのです。ましてその頃は西洋人のいう事だと云えば何でもかでも盲従して威張ったものです。だからむやみに片仮名を並べて人に吹聴して得意がった男が比々皆是(みなこれ)なりと云いたいくらいごろごろしていました。他(ひと)の悪口ではありません。こういう私が現にそれだったのです。たとえばある西洋人が甲という同じ西洋人の作物を評したのを読んだとすると、その評の当否はまるで考えずに、自分の臍に落ちようが落ちまいが、むやみにその評を触れ散らかすのです。つまり鷄呑と云ってもよし、また機械的の知識と云ってもよし、とうていわが所有とも血とも肉とも云われぬ、よそよそしいものを我物顔(わがものがお)にしゃべって歩くのです。しかるに時代が時代だから、またみんながそれを賞めるのです。

けれどもいくら人に賞められたって、元々人の借着をして威張っているのだから、内心は不安です。手もなく孔雀(くじゃく)の羽根を身に着けて威張っているようなものだから。それでもう少し浮華(ふか)を去って撃実(しじつ)につかなければ、自分の腹の中はいつまで経たっても安心はできないという事に気がつき出したのです。

たとえば西洋人がこれは立派な詩だとか、口調が大変好いとか云っても、それはその西洋人の見るところで、私の参考にならん事はないにしても、私にそう思えなければ、とうてい受売(うけうり)をすべきは物ではないのです。私が独立した一個の日本人であって、けっして英国人の奴婢(どひ)でない以上はこれくらいの見識は国民の一員として具えていなければならない上に、世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。

しかし私は英文学を専攻する。その本場の批評家のいうところと私の考(かんがえ)と矛盾してはどうも普通の場合気が引ける事になる。そこでこうした矛盾がはたしてどこから出るかという事を考えなければならなくなる。風俗、人情、習慣、潮(さかのぼ)つては国民の性格皆この矛盾の原因になっているに相違ない。それを、普通の学者は単に文学と科学とを混同して、甲の国民に気に入るものはきっと乙の国民の賞讃を得るにきまっている、そうした必然性が含まれていると誤認してかかる。そこが間違っていると云わなければならない。たといこの矛盾を融和する事が不可能にしても、それを説明する事はできるはずだ。そうして単にその説明だけでも日本の文壇には一道の光明を投げ与える事ができる。

こう私はその時始めて悟ったのでした。はなはだ遅まきの話で慚愧(ざんき)の至であ

りますけれども、事実だから偽らないところを申し上げるのです。

私はそれから文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるというより新しく建設するために、文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいうと、自己本位という四字をようやく考えて、その自己本位を立証するために、科学的な研究やら哲学的の思索に耽り出したのであります。今は時勢が違いますから、この辺の事は多少頭のある人にはよく解せられているはずですが、その頃は私が幼稚な上に、世間がまだそれほど進んでいなかったのです、私のやり方は実際やむをえなかったのです。

私はこの自己本位という言葉をも自分の手に握ってから大変強くなりました。彼ら何者ぞやと感慨が出ました。今まで茫然と自失していた私に、ここに立って、この道からこう行かなければならないと指図(さしず)をしてくれたものは実にこの自我本位の四字なのであります。

自白すれば私はその四字から新たに立出したのであります。そうして今のようにただ人の尻馬にばかり乗って空騒ぎをしているようではなはだ心元ない事だから、そう西洋人ぶらぶらでも好いという動かしづからざる理由を立派に彼らの前に投げ出してみたら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思って、著書その他の手段によって、それを成就するのを私の生涯の事業としようと考えたのです。

その時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めたのです。比喻で申すと、私は多年の間懊惱(おうのう)した結果ようやく自分の鶴嘴(つるはし)をがちりと鉋脈に掘り当てたような気がしたのです。なお繰り返していうと、今まで霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を教えられた事になるのです。

かく私が啓発された時は、もう留学してから、一年以上経過していたのです。それでとても外国では私の事業を仕上げる訳に行かない、とにかくできるだけ材料を纏めて、本国へ立ち帰った後、立派に始末をつけようという気になりました。すなわち外国へ行った時よりも帰って来た時の方が、偶然ながらある力を得た事になるのです。

ところが帰るや否や私は衣食のために奔走する義務がさっそく起りました。私は高等学校へも出ました。大学へも出ました。後では金が足りないのです、私立学校も一軒稼(けんかせ)ぎました。その上私は神経衰弱に罹りました。最後に下らない創作などを雑誌に載せなければならぬ仕儀(しぎ)に陥りました。いろいろの事情で、私は私の企てた事業を半途(はんと)で中止してしまいました。私の著わした文学論はその記念というよりもむしろ失敗の亡骸(なきがら)です。しかも畸形児(きけいじ)の亡骸です。あるいは立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廃墟のようなものです。

しかしながら自己本位というその時得た私の考は依然としてつづいています。否(いな)年を経るに従ってだんだん強くなります。著作的事業としては、失敗に終りましたけれども、その時確かに握った自己が主で、他は實(ひん)であるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。私はその引続きとして、今日なお生きていられるような心持がします。実はこうした高い壇の上に立って、諸君を相手に講演をするのもやはりその力のお蔭かも知れません。

以上はただ私の経験だけをざっとお話ししたのでありますけれども、そのお話しを致した意味は全くあなたがたのご参考になりはしまいかという老婆心からなのであります。あなたがたはこれからみんな学校を去って、世の中へお出かけになる。それにはまだ大分時間のかかる方もございましょうし、またはおっつけ実社界に活動なさる方もあるでしょうが、いずれも私の一度経過した煩悶(たとい種類は違って)もを繰返しがちなものじゃなかろうかと推察されるのです。私のようにどこか突き抜けたくっても突き抜ける訳にも行

かず、何か掴(つか)みたくっても薬缶頭(やかんあたま)を掴むようにつるつるして焦燥(じ)れなくなったりする人が多分あるだろうと思うのです。

もしあなたがたのうちですでに自力で切り開いた道を持っている方は例外であり、また他(ひと)の後に従って、それで満足して、在来の古い道を進んで行く人も悪いとはけっして申しませんが、(自己に安心と自信がしっかり附随しているならば、)しかしもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てるところまで進んで行かなくてはいけないでしょう。いけないというのは、もし掘りあてる事ができなかったなら、その人は生涯不愉快で、始終中腰になって世の中にまごまごしていなければならないからです。私のこの点を力説するのは全くそのためで、何も私を模範になさいという意味ではけっしてないのです。私のようなつまらないものでも、自分で自分が道をつけつつ進み得たという自覚があれば、あなたがたから見てその道がいかに下らないにせよ、それはあなたがたの批評と観察で、私には寸毫(すんごう)の損害がないのです。私自身はそれで満足するつもりであります。しかし私自身がそれがため、自信と安心をもっているからといって、同じ径路があなたがたの模範になるとはけっして思っていないのですから、誤解してはいけません。

それはとにかく、私の経験したような煩悶が貴方がたの場合にもしばしば起るに違いないと私は鑑定(かんてい)しているのですが、どうでしょうか。もしそうだとすると、何かに打ち当たるまで行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、あるいは十年二十年の仕事としても、必要じゃないでしょうか。ああここにおれの進むべき道があった！ ようやく掘り当てた！ こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしょうか。容易に打ち壊されない自信が、その叫び声とともにむくむく首を擡(もた)げて来るではありませんか。すでにその域に達している方も多数のうちにはあるかも知れませんが、もし途中で霧が靄(もや)のために懊惱(おうのう)していられる方があるならば、どんな犠牲を払っても、ああここだという掘り当てるところまで行ったらよろしかろうと思うのです。必ずしも国家のためばかりだからというわけではありません。またあなた方のご家族のために申し上げる次第でもありません。貴方がた自身の幸福のために、それが絶対に必要じゃないかと思うから申上げるのです。

もし私の通ったような道を通り過ぎた後なら致し方もないが、もしどこかにこだわりがあるなら、それを踏潰(ふみつぶ)すまで進まなければ駄目ですよ。もっとも進んだってどう進んで好いか解らないのだから、何かにぶつかる所まで行くよりほかに仕方がないのです。私は忠告がましい事をあなたがたに強いる気はまるでありませんが、それが将来あなたがたの幸福の一つになるかも知れないと思うと黙っていらなくなるのです。腹の中の煮え切らない、徹底しない、ああでもありこうでもあるというような海鼠(なまこ)のような精神を抱いてぼんやりしては、自分が不愉快ではないか知らんと思うからいのです。不愉快でないとおっしゃればそれまでです、またそんな不愉快は通り越しているとおっしゃれば、それも結構であります。願くは通り越してありたいと私は祈るのであります。

しかしこの私は学校を出て三十以上まで通り越せなかったのです。その苦痛は無論鈍痛ではありましたが、年々歳々感ずる痛には相違なかったのであります。だからもし私のような病気に罹った人が、もしこの中にあるならば、どうぞ勇猛にお進みにならん事を希望してやまないのです。もしそこまで行ければ、ここにおれの尻を落ちつける場所があったのだという事実をご発見になって、生涯の安心と自信を握る事ができるようになると思うから申し上げるのです。